

A-28 学校給食における喫食状況の実態について

大府西中*、中京女大家政**、〇久保悦子*、西岡茂子*、江藤義春**

目的 少年期の栄養が大切であることはいうまでもないが、それだけに学校給食の役割もまた非常に重要である。学校給食の場合、一般に児童・生徒の栄養基準量から献立がたてられており、とくに栄養面での問題はないにしてもその喫食率が非常に問題となってくる。そこで本研究は愛知県大府市内の中学校における喫食状況等からその実態を知り、今後の学校給食の一助とすることをも目的として調査を行ったのでその結果を報告する。

方法 調査対象：愛知県大府市内の中学校、A・B2校の生徒、各学年3クラスを無作為抽出615名（男子303名、女子312名）；調査期間：昭和52年12月1日～12月22日；調査方法；あらかじめ用意したアンケート用紙に食事終了後毎日記入させ調査最終日にまとめて回収した（無記名）。

結果 主食および副食の完全喫食者率を比較すると男女ともA校よりB校の方が高く、さらに学年間では両校とも一般に3年生女子の完全喫食者率の低下が認められた。15日間を通じた完全喫食者率の変化は、主食の場合、男子は両校とも比較的平均しているのに対し、女子はその変化が非常に激しい。しかし、副食の場合は両校間で若干の差が認められた。また主食として米飯および麺類を用いた場合、パン食に比べ両校とも完全喫食者率の増加がみられ、その傾向はとくにA校に著しかった。牛乳は学校・学年あるいは男女間でもかなり異なっており、B校では男女とも1・2年生に比べ3年生の完全喫食者率が低下しており、とくに女子にその傾向が著しい。しかし、A校ではまったく逆に男女とも1・2年生に比べ3年生の方が高くなっており、その傾向もまた、女子に強く認められた。